

19目 水口 -> 石部 -> 草津

19日目は12月11日(土)、7時に近江鉄道水口石橋駅をスタート、雲が多いものの上空は晴れ、山間地のことでまだ日の出前。寒い歩き始めると温くなる。旅のお供のFMは受信良好、アメリカンポップスの特集をしていて殆どが知らない曲、知らない歌手、時々どこかで聞いた記憶のある曲。

水口宿 50番目 その2

水口の日の出



18日目には駅を探して早足で駆け抜けた水口宿を、宿場入口まで戻ってから歩き始める。宿場入口は東方向となり、朝日が家並みの上に出て、日光が真正面から目に飛び込んでくる。日の出を全く予想していなかったため、最初的一条の光が射すところは写真に取れず残念。

水口宿は、本陣は残っておらず、跡を示す石碑のみ。脇本陣は残っていて現在も人が住んでおり、改築されているものの建物全体は大きく堂々としている。他にも古い家が多く、下の写真の「桔梗屋文七」は格好いい屋号につられて写真をとってしまった。一体何の商いだろう？

水口は城下町でもあり、古い事物が沢山残っているようで、街の角々に「曳山一山車」を入れる背の高い倉庫が目につく。バスターミナルの一角に時計塔があり、その中に「曳山」のミニチュアが展示してある。

水口宿の脇本陣



桔梗屋文七



時計塔



「曳山」のミニチュア



「曳山」の倉庫



宿場の中ほどに大岡寺があり、芭蕉の句碑があるとのこと。又、この寺には鴨長明発心之地の石碑があり、調べたところ、随筆「方丈記」で名高い鴨長明が「海道記」のなかで「大岳寺というところに泊まり、世の無常を感じ、髪をそり、旅寝する・・・」との記述があるとのこと、それで発心。この寺の境内はきれいに掃かれ、ほうき目がくっきりとついており、句碑を探すのに足跡をつけるのは悪い気がして端っこの方を歩いてしまった。



大岡寺



中のちふたつ
くに活たる
さくらかな
芭蕉

水口の浮世絵



街角の信用金庫の壁には水口の浮世絵があり、それによると当地名物はかんぴょう。

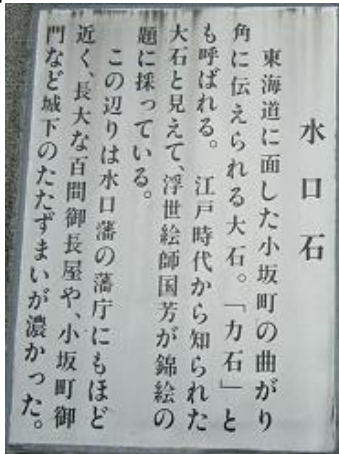
面白いもの2題

水口宿自体は大きな宿場ではなく、30分も歩けば町外れとなる。その町外れで面白いものを二つ見つけた。一つは会社の看板、右の看板の火薬も初めてお目にかかる会社名だが、爆砕は凄い。どれだけのニーズがあるのか、ビジネスとして成り立つのか、ひと事ながら気になる。以前、大津近傍の琵琶湖の湖畔に、建造途中で工事中止となり10年以上もそのままになっていた有名な幽霊ビルがあって、その後爆薬を使ってそのビル

火薬と爆砕の看板



水口石の説明



水口石



を爆破し、取り壊したとのニュースを見た記憶がある。ひょっとしたら、この「琵琶湖爆砕」の仕事かもしれない。

もう一つは水口石、街角に漬物石には大き過ぎるサイズの石がおかれ、水口石との説明があり、昔からこの場所にあったらしい。力石とも呼ばれる以上、この石を持上げる競争をしたのかも。直径70~80cm程度で大石とは言いがたいが、両手で持上げるにはちょっと。この東海道ウォーキングとしては3つ目の力石で、その三つの中では最大。

からくり時の鐘



水口宿を出ると、旧東海道は郊外の直線の道となり、人家はあっても道路に面したところだけで、その裏は田畑、数百 m ほど離れたところを国道1号線が平行しており、国道沿いの建物や看板が見える。旧東海道は車の通行は少なく、自転車の5~6人の女子中学生がすれ違う際、一斉に「お早うございます」の挨拶、勿論返礼、嬉しくなってしまう、本当に単純。片側だけの「東海道の松並木」も残っている。途中の公民館の前に「からくり時の鐘」がある。人形が撞木を持ってはしごを上っているが、ひょっとしたら人形が鐘を叩くのかも？時間があれば見たかった。

北脇縄手の松並木



横田の渡しと大常夜燈

日本一の横田の大常夜燈



水口から1時間ほど歩くと、横田川(野洲川)にぶつかる。江戸時代には軍事上の理由からここに橋を作るのを禁止され、横田の渡しがあった。日本一と言う高さ10mの大常夜燈は現存していて、旅人はこの大常夜燈を目印にしたとのこと。川沿いは公園になっていて公園から川を見ると鳥が何羽か水浴びをしており、小さな川だが歩いて渡るのには厳しそうに見える。公園の休憩所に座って小休憩し、今迄歩いてきて暑いので1枚脱ぐものの、座っていると直ぐに冷えてきて、又着込む。横田川は野洲川、現役時代には野洲と云えばIBMの野洲工場だったが、遠い昔となってしまった。現在はこの地に渡しは無く、川沿いに歩いて国道1号線に合流し、横田橋の側橋を渡り、行政的には今まで歩いてきた甲賀市から湖南市となる。

天井川

横田橋から直ぐに国道1号線と分かれ、JR草津線の三雲駅の駅前に出て右折し、時々現れる古い家の写真を撮りながら歩いていくとトンネルがある。このトンネル上部に「大沙川」と書かれていて、トンネルの上は川、昔々に地理で勉強した、天井川。この付近は近畿として昔から稲作と川の管理が行われてきた為だろうが、この日は計3つの天井川のトンネルをくぐった。

天井川の下をくぐるトンネル



夏見

夏見地区で見たシルバーセンターのポスターの絵の図柄が良く分からず、暫く考えた。多分、鯰の擬人化で、このあたりは鯰で有名なのか、或いは琵琶湖の大鯰をイメージしているのか。でも一体このポスターは誰に何をアピールしたいのか分からない。

この地区にある造り酒屋の建物が見事で、調べたら 1805 年操業とあった。

シルバーセンターのポスター



造り酒屋の建物



石部宿 51 番目

神水亀



横田橋から更に 1 時間ほど歩いて石部宿に到着。昔ここに金山があったことから、頭の固い融通のきかない人を石部金吉と言う様になったとのこと。まず、石部宿の入口にある吉姫神社に寄り道、寄り道の理由は神社名に「姫」がついているから。神社の由来には上鹿葦津姫神と吉比女大神が祭神とあり、といってもどんな神なのか調べても良くわからず、絶世の美人とも書かれていなかった。

神社の中に古い井戸があり、「神水亀」が置かれていて、説明板に「病を癒し齢を延ぶる神水として古代より病める人々の生薬成らしめ給うもう」とある、「でもこれって今は水道水じゃないの?」と突っ込みたくなる。

この神社の入口にあった 8 体の地藏さんは可愛らしかった。どれも石の表面の凹凸は少なく、白地に描かれた目鼻が無ければただの石ころ。

8 体の地藏



宿場内には古い建物が多く、これは本陣かと間違えるような立派な旧家があり、人が住んでいるらしい。しかし本陣そのものは無く、跡を示す石碑があり、無料休憩所の宿駅が建てられている。きよろきよろしながら宿場内を歩いていたらボロボロに壊れた廃屋があった。 火事の焼け跡でもなく、メインストリートにこんな廃屋があるのは珍しい。 風が吹いたら周囲を通行止めにしないと危険な程、しかし台風がきたら綺麗になるかも。

本陣と間違えた旧家



ボロボロの廃屋



銘菓「忍術もなか」ののぼりがあり、ガマにのった忍者(多分児雷也、でも児雷也って甲賀流だっけ?)が描かれている。 買って口に入れたとたんにドロンと消えてしまう「もなか」のイメージを思い浮かべ、笑ってしまう。

前回の土山宿で色んな屋号のことを書き、その中の「ぬしや」について「何の商いだろう?」と書いたら、愛読者のNさんから「漆塗りのこと」との返事を頂いた。 この石部宿にも「ぬしや」があり、店内を覗くと仏壇の横に「うるしぬり」の看板があった。 Nさん、ご教示有難うございました。

忍術もなかの
のぼり



石部のぬし屋



ぬし屋の店内



宿場の中ほどに真明寺があり、芭蕉の句碑があるとのこと。 碑そのものは全く読めず、裏に回っても字はなく、平坦な方が表で字らしきものがあるのが分かる程度。
この宿場の街灯が面白い、と言っても街灯そのものではなく、街灯の下にある看板、股旅姿の漫画が楽しい。



真明寺の芭蕉句碑

つつじいけて
その陰に
干鱈(ひだら) さく女
芭蕉



石部の街灯



近江富士

雲が厚くなって薄暗くなり、パラパラと雨が降り始めるが傘を差すほどではない。
石部宿のはずれになると人家が途絶えて田畑が広がり、旧東海道はJR草津線沿いとなり、その草津線の向こうに近江富士の三上山のシルエットが見える。



近江富士 三上山

生涯学習の町



この山を7巻半した「大ムカデ」を武将「俵藤太」が弓矢で退治したという伝説が残っており「ムカデ山」の別名もあるとのこと、頂上には神社と磐座があるそうで高さ432m、登りたくなった。
このあたりは行政的には栗東市。集落があり、「生涯学習都市」伊勢落とある、興味が湧くことについての学習は楽しいが、人に言われての学習はイヤだな。
この伊勢落はどう読むのだろうと考えながら歩いていると、次の集落にも漢詩の石碑があり、ここは上野(かみの)と読むことが分かる。

上野夜雨の石碑



六地蔵の大角家

六地蔵地区に入ると見事な構えの大邸宅があり、「和中散本舗」の大角家で、その庭園は国指定の名勝となっていて見学可能、雨が少しづつ強くなってきて先を急ぎたくなり、見学は割愛。

和中散本舗 大角家



この大角家は、江戸時代に旧東海道の六地蔵で道中薬「和中散」—ブランド名は「ぜさい」—を売っていた大角弥右衛門（おおすみやえもん）の店舗兼住宅跡。かつて徳川家康が腹痛をおこした際、この薬を服用してすぐに治ったことから、一躍その名を知られる、現在の建物は、寛永年間（1624～44）の建物をそのまま残したものの。その大角家の道を隔ててまん前に古い「お堂」があり、説明板を見るとこれは隠居所、この隠居所は夏は涼しく冬はものすごく寒そう。

大角家の隠居所



鉄輪のある家



六地蔵やこの付近には旧家が多いが、家の前に蒸気機関車の鉄輪を置いている家があった。ご主人は鉄ちゃんだな、きっと。

昼飯時となり、レストランを探しながら歩くが旧東海道には一軒もなく、国道に出て最初に見つけた居酒屋で昼食、ランチ定食の豚生姜焼き定食を注文、コーヒー付で970円、豚肉の量が多く味もOK。

居酒屋を出ると雨は本格的な降りとなっていて傘を開いてウォーキングを再開。雨中での写真は撮りづらく、小野地区、手原地区と急ぎ足で通過。手原の外れに石碑があり、すずめ茶屋跡と書いてあって、そこが東海道と中山道の分岐点と知る。

すずめ茶屋跡
東海道と
中山道の
分岐点

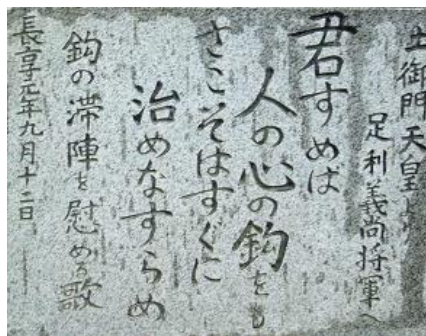


鈎の陣

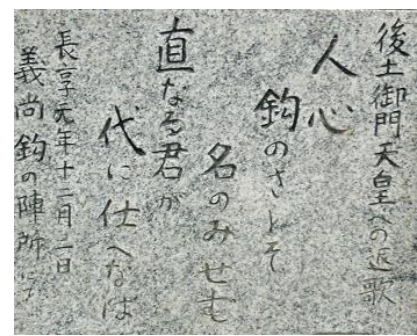
「9代将軍 足利義尚公 鈎の滞陣ゆかりの地」と書かれた石碑のある小公園が現れる。一体何のことか調べると「室町幕府は応仁の乱後、勢力が衰え社会は乱れた。近江守護職佐々木高頼は社寺領等を領地とした。幕府の返還勧告に応じない佐々木氏を討伐のため、時の将軍義尚は長享元年十月近江へ出陣、鈎に滞陣した。滞陣二年病を得、延徳元年三月二十五歳の若さで当地で陣没した」とある。その鈎がこの地。長期滞陣中の将軍に対する天皇の歌、それについての返歌や他の公家からの歌碑もある。歯の浮くようなお世辞を言い合っている歌、こんなものよりも恋の歌の方がいいな。



鈎の滞陣碑



天皇の歌



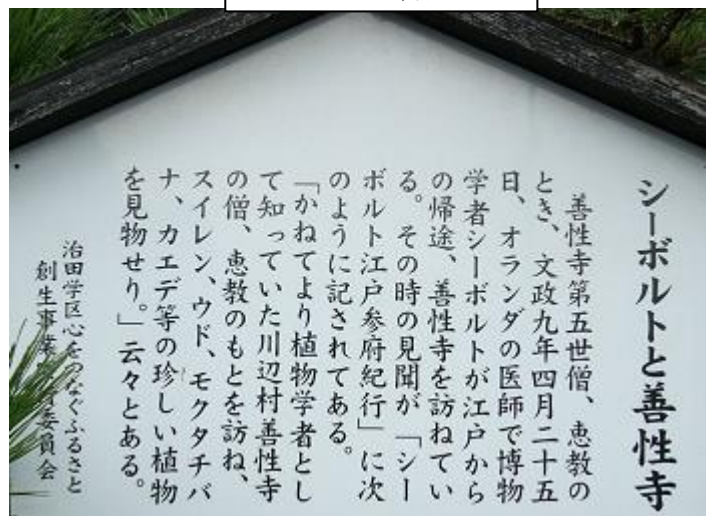
将軍の返歌

川辺とシーボルト

つまらないお世辞の歌よりも、面白いものを発見、付近の道路標識に「川辺」の漢字の読みが書かれていて「かわづら」。へえー、なるほどそんな読みもあるかと感心。その川辺地区にシーボルトに関係のある善性寺があり、寄り道。その関係は右の説明板に書かれているが、江戸時代の日本にそんな植物学者がいたのかとまた感心。



川辺の道路表示



シーボルトと善性寺

次の地区は目川、旧家の前に黒い実物大の牛の人形(布製に見える)が置いてあり、何の説明も看板も無し、何で置いてあるのだろうか。

目川には田楽発祥の地の石碑があり、「東海道を往来する旅人の休憩場として江戸幕府によって立場茶屋が置かれた。ここで供された食事は地元の食材を使った菜飯田楽で独特の風味を有し東海道の名物となった。天明時代の当家の主人岡野五左衛門は「岡笠山」と号した文人画家である。与野蕪村に師事し、その力量は「よく師法を受け、筆神に入る」と称賛され「幕府の命に応じて揮毫し、将軍の覧に供す」と記録されている」とある。



牛の人形



田楽発祥の地

草津宿 52 番目

老牛馬養生所跡



左いせ道
右しがらき道



左みの道
右いせ道



草津本陣



野路の玉川



石部から約 12Km、やっと 52 番目の宿場となる草津にたどり着く。宿場の手前に「老牛馬養生所跡」の石碑があり、何のことも見ると説明板には「この施設は、和辻村榎の庄屋岸岡長右衛門が湖西和辻村の牛場で老廃牛馬の打はぎをしている様子を見て、その残酷さに驚き、これから老牛馬であっても息のある間は打はぎすることを止めようと呼びかけ、天保十二年四月当地が東海、中山両道を集約する草津宿の近くであることから、ここに老牛馬の余生を静かに過させる養生所を設立、県下の老牛馬を広く収容された」とある。

これも天井川の草津川、と言っても全く水の無い川を越えると草津宿、入り口には道標があり、左東海道いせ道、右金勝寺しがらき道、と刻んである。道標の沿って進むとその先は T 字路になっていて又道標があり、左中山道みの道、右東海道いせ道とある。

旧東海道は繁華街となり、大きな本陣が残っていて見学は有料。受付に人がおらず面倒くさくなり見学はパス。

雨は止まず、写真は撮りづらくなる。

宿場の説明板には、草津宿は大宿で水陸交通の要所であり、関所的な役割を担ってきたとのことで、荷物の重量をチェックする「貫目改所」がおかれ、その付近を「政所」と称したとのこと。

アーケードのある繁華街にはところどころに宿場の遺跡がある。時刻は既に 3 時近く、急ぎ足で次の大津に向かう。

草津のはずれに、「野路の玉川跡」なる休憩所があり、そこで一休み。

野路の玉川を調べると「平安時代末 (12 世紀) から有名になった歌所で、萩の玉川とも言われ、日本六玉川のひとつとして知られ、また鎌倉時代、有名な宿駅でもあった。

往来の旅人たちも、秋には「詩に詠まれている、野路の篠原 (現在の平野) あたりを越えると、一面になみいる萩の花の景観を堪能した」とのこと。萩の玉川とは優雅な名前。

野路の玉川で休憩していると、リュックを背負った中年女性2人組みが入ってきて挨拶、蜜柑を勧められ、聞けば年内京都着目標でお江戸日本橋を出発して東海道を歩き、今日は大津泊、明日には京都着の予定とのこと。師走に東海道を歩いている人はいないだろうと考えていたら、そうでもなくてチラホラ見掛け、声をかけられたのは3組目、全て京都に向かって歩いている人ばかり。逆方向には会わなかった。師走に京都を出発する旅人はいないが、年内に京都に到着しようと歩く旅人は多いということか。

野路からは一心不乱に歩いて、16時にJR瀬田駅に到着。

今回のマンホールの蓋

水口、何の模様?
町の花「サツキ」と、水口曳山祭の「曳山の車輪」をデザイン



石部
町の花「サツキ」と町章、それに東海道歴史資料館をデザイン



栗東
町の木「貝塚伊吹」に町の花「キンセイカ」そして町の鳥「メジロ」をデザイン



19日目は5万歩、約30Km。

愛読者のMさんに教えて頂き、往きはJR加茂駅に車を置き、5時半の始発で、JR加茂-JR柘植-JR貴生川-近江鉄道水口石橋駅のルートとなり、帰りはJR瀬田-JR京都-JR木津-JR加茂に6時帰着。駐車場に置いてあった車で桜井の家に着いたのは午後7時。

次回は 大津 -> 京都

19日目

